

崔先生との最初の出会いは少なくとも四半世紀は遡ると思うのだが、はっきり思い出せない。当時私は総理官邸で内閣情報調査室長をつとめていた。安重根の生涯を訪ねる旅でハルピンまでお伴したほど崔先生の熱心な尊崇者である落合一秀さんの勉強会で初めてお会いしたようにも記憶しているが、いずれにせよ日韓談話室では濃密な、かつ時空間を超えた歴史的な、そして現代史の貴重な教えを数々いただいている。

これも、いつだったか明確でないが落合さんのアレンジで小川剛太郎ご夫妻たちと韓国旅行したことも印象に残っている。崔先生のご長男にもお会いしたが、三十八度線の安保ツアーをした後ソウルに戻って韓国国会を見学した。崔先生に引率されて国会議長を孝敬したのだが、時間がなかったこともあって議長との意見交換はすべて日本語で行われた。対日感情が厳しい韓国での、しかも国会議長室での出来事だっただけに今思い起しても奇跡的だし、崔先生なしには全く起こりえないハプニングであったと思う。

酒の席をふくめて崔先生のエピソードはいくらでもあるが一つだけ記すならば、ある時崔先生が「日本人の好きな歌が二つある」と言われた。一つは「海ゆかば」で、大伴家持の古詩に昭和十二年信時潔が曲をつけた。「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍……」と続く悲壮にして哀調を帯びた歌で確かに我々の心をうつ一曲である。二曲目は「田原坂」であるという。「雨は降る降る、人馬は濡れる、越すに越せない田原坂……」と愛唱されているが、崔先生が尋常でないのは、この歌詞に誤りがあると指摘されたことだ。「西郷隆盛おいらの兄貴 国のためならオハラハ死ねと言った」とあるが、西郷隆盛は「死ね」ではなく「死ぬ」と言った、というのが崔先生の指摘である。確かに、国のためなら「死ぬ」と言った、の方が大西郷のためにも西郷さんを慕う薩摩兵児のためにもピッタリくる。崔先生の見識に脱帽した。

しかし、脱帽するだけでは不甲斐ないので私は言った。「先生、日本人の好きな歌はもう一つありますよ」と。「それは白虎隊の歌です」。「戦雲暗く日は落ちて、古城に月の影悲し、誰が吹く笛か知らねども、今宵名残りの白虎隊」と歌い、途中で「南鶴ヶ城を望めば、砲煙あがる……」と詩吟が入る。

いま振り返ってみても、外国人である崔書勉先生とこういう会話を楽しめることは他では考えられない至福である。ひとえに崔先生の該博な知識による恩恵であるし、さらには

日本と韓国の間に通ずる心のヒダというか心情基盤があつて、それが歌とか情感に表出するのを崔先生が鋭く、しかしさりげなく我々に問題提起しておられるのだと思う。

日韓の架け橋としてというよりも、我々多くの「学徒」たちの変わらぬ先達として崔書勉先生にいつまでもご壮健にて学の道を探求されるよう心から希求する次第である。